

# 中国僧伝類に於ける若干の問題点について

—特に朝鮮僧記載史料を中心として—

福土慈稔(立正大学助教授)

## 一、始めに

朝鮮仏教史を研究するに際し、中国史料及び日本史料が重要史料となることは誰もが認めるところであり、日中の僧伝類に見られる朝鮮僧の記載を史料として用いることは既に多くの先学が行ってきたことである。例えば、李能和師(1869-1943)の大著『朝鮮仏教通史』(1918年)には師が朝鮮仏教史研究に際し、中国及び日本の僧伝は勿論、日中の章疏、及び正史をも網羅していたことが知られており、また権相老師(1879-1965)は多くの日中の僧伝から朝鮮僧の記述を一つ一つ抜粋整理し、それが『韓国仏教資料鈔』として我々後学の資となっている。しかし、金知見先生は研究とは道路工事と同様で補修工事が必要であり、新たに作りながらも補修していかなければならない終わりが無いものだ、と生前常々筆者に言われていた。確かに、どのような研究も完全と思われても完全に依拠できるものではない。また史料も朝鮮仏教を研究する際に用いる日本及び中国の史料は、あくまでも日本人、及び中国人の手による史料であり、史料制作の目的が朝鮮の歴史を書きとどめようとするものではないために朝鮮への言及も付随的なものにすぎないのである。

本稿は日中の史料の中で特に中国史料に限定し、先ず金知見先生のお言葉に従って、我々の指針となっている権相老師『韓国仏教資料鈔』の若干の問題点を指摘し、次に中国僧伝類の朝鮮僧の記述の問題点を指摘し、先行研究や史料を用いる際の問題点を確認しようとするものである。

## 二、権相老『韓国仏教資料鈔』の若干の問題点

権相老師が指摘する中国の僧伝は『退耕堂全書』第六巻と第七巻に『韓国仏教資料鈔』四、及び『韓国仏教資料鈔』十五として収録されている。それ等を参照し、更に師の見落としを補足して表にしてみると次のようである。

書名	事項及び僧名	補足
(1) 続高僧伝	1-唐新羅国皇隆寺积円光伝円安 2-唐新羅国大僧統积慈蔵伝円勝 3-伯济達拏山寺积慧顕伝	1-王高德遣僧 2-高麗実法師 3-高麗印師 4-沙門波若 5-高麗沙門智晃 6-新羅光法師
(2) 大唐求法高僧伝	1-新羅阿離耶跋摩法師 2-新羅慧業法師 3-新羅玄太法師 4-新羅玄恪法師 5-新羅復有法師二人 6-新羅慧輪法師 7-新羅玄遊法師	1-新羅求本法師
(3) 弘贊法華伝	1-唐伯济国积慧顕 2-唐新羅沙弥	1-积縁光
(4) 法華経伝記	1-隋新羅縁光 2-越州観音道場道人	1-百济国達拏山寺积慧顕
(5) 积門自鏡録	1-唐新羅国興輪寺僧变作蛇身事一尼附録 (新羅国禅師割肉酬施主事一新録)	1-新羅順耀法師
(6) 三宝感應要略録	1-新羅僧兪誦阿含生浄土感應	
(7) 宋高僧伝	1-唐京師西明寺円測伝 2-唐新羅国順耀伝 3-唐新羅国義湘伝 4-唐新羅国黄竜寺元暁伝大安 5-百济国金山寺真表伝 6-陳新羅国玄光伝 7-唐成都浄衆寺無相伝 8-唐池州九華山化城寺地藏伝 9-唐朔方靈武下院無漏伝 10-唐高麗国元表伝	1-新羅勝莊法師 2-新羅国宣師 3-积靈照 4-积道育

(8) 景德伝灯録	1-新羅国本如法師 2-鷄林道義禪師 3-新羅国慧禪師 4-新羅国洪直禪師 5-新羅国無染禪師 6-新羅国玄北禪師 7-新羅国覺体禪師 8-新羅国道均禪師 9-新羅国品日禪師 10-新羅国迦智禪師 11-新羅国忠彦禪師 12-新羅大茅和尚 13-新羅国彦忠禪師 14-文聖大王 15-憲安大王 16-興德大王 17-宣康太子 18-新羅国順支禪師 19-新羅国智異山和尚 20-新羅欽忠禪師 21-新羅行寂禪師 22-新羅朗禪師 23-新羅清虚禪師 24-新羅国金藏和尚 25-新羅清院和尚 26-新羅瑞巖和尚 27-新羅泊巖和尚 28-新羅大嶺和尚 29-新羅臥竜和尚 30-新羅国大無為禪師 31-新羅雲住和尚 32-新羅慶猷禪師 33-新羅慧禪師 34-新羅龜山和尚 35-新羅国慧雲禪師 36-高麗雪嶽令光禪師 37-高麗道峰慧炬国師 38-高麗国慧洪禪師	1-新羅大証禪師 2-新羅洪直禪師 3-高麗靈鑿禪師
(9) 仏祖統紀	1-十六祖四明宝雲尊者大法師 2-新羅法融禪師 3-新羅理応禪師 4-新羅純英禪師 5-新羅玄光禪師 6-高麗諦観法師 7-高麗義天僧統 8-宋宝雲義通禪師	1-禪師般若
(10) 新脩科分 六学僧伝	1-陳玄光 2-隋沙門波若 3-唐慈藏 4-唐義湘 5-唐地藏 6-晋靈照 7-晋道育 8-隋法? 9-周会隱 10-周円測 11-唐円光 12-唐帝示階者 13-唐慧顛 14-唐元暎 15-唐真表 16-唐元表 17-唐無相	1-高麗智晃 2-高麗実法師 3-新羅光法師 4-高麗印公 5-無漏
(11) 統伝灯録	1-高麗坦然国師	
(12) 神僧伝	1-玄光 2-金師 3-真表 4-無相 5-地藏 6-無漏	

上表をみると、権相老師が挙げる中国僧伝は、史料または巻の冒頭に目録があるか、または目録がない場合でも各伝の冒頭に「唐新羅国黄竜寺元暁伝大安」というように朝鮮関係の国名を記す小題が附されていて瞬時に朝鮮僧と知りうる史料が殆どある。よって(1)『続高僧伝』では補足で附記したように巻8法上伝中に記載される高句麗国大丞相王高德が法上の許に質疑のために派遣した某僧<sup>1</sup>、巻14慧持伝・巻15法敏伝中の高麗実法師(実公)、巻15法敏伝・霊睿伝の高麗印師(印公)、巻17智越伝の波若<sup>2</sup>、巻18曇遷伝の高麗沙門智晃、巻22慧旻伝の新羅光法師が挙げられていない。また(5)『釈門自鏡録』では巻下続補の浪那郡順耀伝中の新羅順耀法師も挙げられておらず、同様に(7)『宋高僧伝』でも巻4慧沼伝中にみられる新羅勝莊法師、巻8玄覚伝の新羅国法師、巻13善静伝の高麗靈照、そして巻23の小題で「晋天台平田寺道育伝」となっている新羅道育の名が挙げられていない。これは(1)(7)を典拠とする(10)『新脩科分六学僧伝』から抽出されている朝鮮僧に関しても同様であり、朝鮮僧以外の伝中に記載される朝鮮僧侶が挙げられていないのである。勿論、(2)『大唐求法高僧伝』では序に続く目次で新羅慧業法師の次に新羅求本法師の名がみられているもの「目次則此次有新羅求本法師 而正文則無之 是可疑也 退耕附識」<sup>3</sup>として意識的に資料鈔に挙げなかった例もあるが、しかし殆どが今述べたような各史料の冒頭目次に名がなく朝鮮僧以外の僧の伝中に組み込まれていたために見落とししたものと、(9)『仏祖統紀』の禅師般若のように「波若」であるべきものが「般若」となっていたために見落とししたもの<sup>4</sup>、そして(3)『弘贊法華伝』の縁光<sup>5</sup>、(4)『法華経伝記』の慧顕<sup>6</sup>、(8)『景德伝灯録』の大証

<sup>1</sup> 『続高僧伝』(大正50)の法上傳では「致有高句麗国大丞相王高德。乃深懷正法崇重大乘。欲播此积風被于海曲。然莫測法教始末緣由西徂東壤年世帝代。故具錄事条。遣僧向隣。啓所未聞事。叙略云(以下略)」(大正50、485中)として王高德が当時の高句麗仏教界の抱く疑問を質疑するために派遣した僧の名は不明であるが、『海東高僧伝』義淵伝(大正50、1016中)で某僧が義淵と記されている。

<sup>2</sup> 『続高僧伝』の智越伝中に「台山又有沙門波若者。俗姓高句麗人也。陳世帰国。在金陵聽講。深解義味。開皇併陳。遊方學業。十六入天台北而智者求授禪法(以下略)」(大正50、570下-571上)として長文にわたり伝が記載されている。

<sup>3</sup> 『退耕堂全書』巻六(退耕堂権相老博士全書刊行委員会、韓国・梨花文化社、1990年、474項)。

<sup>4</sup> 『仏祖統紀』(大正49)巻九冒頭の目次では智者旁出世家として天台等觀禪師の次に華頂般若禪師とあるが、対校本の異記があるとして「般若=波」とする註がみられている(大正49、194下)。また伝では「禅師般若。高麗人。開皇十六年。來詣仏闍求禪法(以下略)」(同、199上)とあり前註と併せると般若が波若を指していることは疑いない。

洪直・靈鑿<sup>7</sup>、(10)『新脩科分六学僧伝』の無漏<sup>8</sup>のような不注意による見落としである<sup>9</sup>。

勿論、以上のような見落としがあっても先駆者としての権相老師の研究の意義は誰もが認めるものであり、師の研究があるが故に、我々は補足並びに補修しつつ新たな研究が出来るのである。ただ、ここで金知見先生の言葉の重みを、そして先行研究を参照するときの注意を再確認する意味で、若干の指摘を行ってみたものである。

### 三、朝鮮僧記載史料の個々の問題点

近年の朝鮮仏教史研究者の中で、朝鮮史料よりも中国史料に比重を置き中国史料に盲目的に依拠する研究が目につく。現存の朝鮮文献史料は11世紀以降のものが殆どであるために、それ以前に成立の中国史料に史料的価値を認めているようである。しかし、自国の史料の場合、古い史料により価値を認めるといことも時としては妥当な時もあるが、他国の場合は如何なものだろうか。ここで11世紀以降成立の史料も含めて少しく検証してみたい。

- 5 『弘贊法華伝』(大正51)巻三の目次では「唐海虞山釈慧旻の次に「唐新羅国釈縁光」(大正51、17下)とあり、伝は「釈縁光。新羅人也(以下略)」(同、20上中)と続く。
- 6 『法華経伝記』(大正51)巻四の目次では「釈慧顕二十一」(大正51、62上)とあり、伝では「百済国達摩山寺釈慧顕二十一」と小題があり「釈慧顕。百済人也(以下略)」(同、64下-65上)と続いている。
- 7 但し、大証と洪直の場合、大証は「新羅大証禪師法嗣二人 文聖大王 憲安大王」(大正51、282上)、洪直は「新羅洪直禪師法嗣二人 興徳大王 宣康太子」(大正51、282上)とあり、大証と洪直の記録がそれ以上記されていないため、文聖・憲安等が禪師の法嗣であるという事のみを重んじて権相老が大証・洪直の名を意図的に採録しなかった可能性もある。しかし靈鑿の場合は金陵清涼文益禪師の法嗣として語句も「高麗靈鑿禪師。僧問。如何是清淨伽藍。師曰。牛欄是。問如何是仏。師曰。拽出癩漢者」(大正51、420上)と記されているため見落としであらう。
- 8 『新脩科分六学僧伝』(已統蔵経77)の目録では巻第二十八経悟科中に唐懐空の次に「唐無漏」(已統蔵経77、72上)とあり、伝では「唐無漏。姓金氏。新羅国王子也(以下略)」(同、320下-321上)とある。尚、権相老が『新脩科分六学僧伝』から挙げる17事項の中に9-周会隠(274上)と12-唐帝示陪者(293下)のように朝鮮僧と関係がみられない事項も収録されている。
- 9 尚、(5)『釈門自鏡録』から抽出した『釈門自鏡録鈔出』(『退耕堂全書』巻六、503-504項)では唐新羅国興輪寺僧変作蛇身事一尼附録の小題のみを挙げて史料を抽出しているが「唐新羅国興輪寺僧変作蛇身事」(大正51、809上)の記事の次に、改行して「新羅国禪師割肉酬施主事一新録」(同、812中下)の記事を全文続いている。これを見るに恐らくは全集編纂の段階で小題が脱落したのと考えられ、他の見落としと指摘したものも編集段階での逸脱の可能性も否定できない。

尚、権相老師の指摘以外に朝鮮僧の記録がみられる中国史料は、筆者が知るだけでも『宗鏡録』<sup>10</sup>、『林間録』<sup>11</sup>、『指月録』<sup>12</sup>、『高僧摘要』<sup>13</sup>、『釈氏蒙求』<sup>14</sup>等を挙げることが出来るが、それ等に関しての詳細は次の機会に述べることとして、本稿では前章の権相老師が挙げた史料を中心に述べてみたい。

### (1) 『続高僧伝』の場合

『続高僧伝』は唐代の道宣(596-667)が梁代の慧皎(497-554)の『高僧伝』を範に、そしてそれを継いで梁初から唐初までの高僧の伝を記録したものである。よって『高僧伝』が収録している巻4潜深伝中の高句麗道人<sup>15</sup>、巻8法度伝中の僧朗<sup>16</sup>、及び朝鮮僧ではないが高句麗に仏教を伝えたとされる曇始の伝<sup>17</sup>等は『高僧伝』に収録されているために『続高僧伝』には収録されておらず、それ以後の八人(補足5-新羅光法師が1-皇隆寺釈円光と同一人の場合)の朝鮮僧が収録されている。

さて、『続高僧伝』に於ける筆者が考える問題としては、まずは『続高僧伝』に対して常盤大定が『続高僧伝』が史料として用いた別伝・行状・碑文の類を列挙しているとされるが<sup>18</sup>、しかしそれは全体からすれば僅かなものであり、

<sup>10</sup> 延寿(904-75)の『宗鏡録』には元暁と義湘(相)の伝が見られる(大正48、477上中)。

<sup>11</sup> 覚範慧洪(1070-1128)の『林間録』には元暁(已統藏経87、247中下)と義天(同、251中)に対する言及がみられている。

<sup>12</sup> 明瞿汝稷の『指月録』(已統藏経85)には巻7「未詳法嗣」に元暁条と高麗観音条、巻11「六祖師第四世」に新羅大茅和尚条がみられている。

<sup>13</sup> 清徐昌治の『高僧摘要』(已統藏経87)には巻2に真表、巻3に円光と慈蔵、巻4に義湘と元暁計五師の伝が載せられている。

<sup>14</sup> 清靈操の『釈氏蒙求』(已統藏経87)には元暁、真表、無相に関する記事がみられるが、それらは全て『宋高僧伝』の記事を咀嚼解釈して簡潔にしたものである。

<sup>15</sup> 『高僧伝』(大正50、347下-348上)。

<sup>16</sup> 『高僧伝』法度伝には「度有弟子僧朗。繼踵先師復綱山寺。朗本遼東人(以下略)」(大正50、380下)とあることから高句麗國遼東城の出身と考えられる。但し、筆者とすればこの僧朗が吉蔵(549-623)の三論学大成に教理的根拠を与えた摂山大師僧朗とするのに確信がない。

<sup>17</sup> 『高僧伝』曇始伝では「釈曇始。関中人。自出家以後多有異迹。晋孝武大元之末。齋経律数十部往遼東宣化。顕授三乘。立以帰戒。蓋高句麗聞道之始也(以下略)」(大正50、392中下)として高句麗に始めて仏教を伝えたのが曇始であるとする。尚、乾足ではあるがこれに着眼した論稿として木村宣(1980)曇始と高句麗仏教、『仏教学セミナー』3号がある。参照されたい。

<sup>18</sup> 『仏典解題事典』(春秋社、第二版1977年、196項)。

また中国僧に限ってのことである。朝鮮僧の場合は道宣の言葉を借りるならば「或博諮先達。或取訊行人」<sup>19</sup>の枠をでることなく、全てが他の記憶を頼りに記したということである。更に言えば、同時代の慈蔵及び慧顕の場合は、他の記憶としても年代的に確実性が高いともいえるが、それ以前の朝鮮僧に関してはどの位の確実性があるかということである。

例えば、巻14の慧慈伝では「高麗実法師」(大正50、537下)と記される実法師が巻15の法敏伝では「高麗実公」(50、538下)となっており、また巻15法敏伝で「高麗印師」(50、538下)と記される印師が同じ巻15の靈睿伝では「高麗印公」(50、539下)となっている。これ等は他の記憶から記したとしても現存史料をみる場合、記載頁が前後で近いために表記の不一致も大きな問題には見えない。しかし、円光の場合は大きな問題となっている。

つまり巻13円光伝の年次に関する記述をみると<sup>20</sup>

- 1-年二十五。乗舶造于金陵。有陳之世。
- 2-光学通呉越。便欲觀化周秦。開皇九年来遊帝宇。
- 3-以彼建福五十八年。少覺不腦。經于七日。遺誠清切。端坐終于所住皇隆寺中。春秋九十有九。即唐貞觀四年也。

以上のようになっており、二十五歳で新羅から金陵に向かい、589年(開皇九)に金陵から長安に遊学し、九十九歳で新羅皇隆寺で没したとされている。しかしここで建福五十八年に没したとされるが、「建福」は新羅真平王が584年に創始した年号であり、真平王は朝鮮史料の『三国史記』新羅本紀によると632年(建福四十九)に没し、634年からは善徳女王の創始する「仁平」年号となる。仮に建福五十八年を算すると641年となるのであるが、『統高僧伝』では3にみられるように建福五十八年を唐年号の貞観四年(630)に当たるとしているため『統高僧伝』の記述から円光の生没年と求法年が

<sup>19</sup> 煩瑣になるが記すと『統高僧伝』序文の当該部分の前後は「今余所撰。恐墜接前緒。故不獲已而陳之。或博諮先達。或取訊行人。或即目舒之。或討讎集伝。南北国史附見徽音。郊郭碑碣旌其懿徳。皆撮其志行举其器略。言約繁簡事通野素」(大正50、425中)となっている。

<sup>20</sup> 『統高僧伝』円光伝(大正50、523下-524中)。

	生年	新羅出国年	没年	
1	532年	556年	630年	続高僧伝貞観四年没説
2	543年	567年	641年	続高僧伝建福五十八年没説

以上のように二説存在することとなる。更に巻13の円光伝以外に巻22の慧旻伝で「十五聽法迴向寺新羅光法師成論」(大正50、619下)と慧旻(573-649)十五歳時の587年に慧旻が「新羅光法師」に『成実論』を学んだとされており、前述のように高麗実法師・高麗印師の表記の不統一の場合は異称が全て巻14・15にあったために「高麗実公」が「高麗実法師」、「高麗印公」が「高麗印師」であるということが容易に理解できたのとは異なり、朝鮮史料と合した場合「新羅光法師」が果たして円光法師を指すのかどうか問題となるのである<sup>21</sup>。

## (2) 『宋高僧伝』の場合

『宋高僧伝』は賛寧(919-1002)が太平興国7年(982)勅命によって、『続高僧伝』に続いて約340余年間の531人の伝を編纂し、瑞拱元年(988)に太宗に奉じたもので、その後の至道2年(996)の若干の治定もみられるとされるものである<sup>22</sup>。さて531人の伝の中で朝鮮僧に関する言及を調べると以下のようである。

- 1-唐京師西明寺円測伝。釈円測者。未詳氏族也(以下略)(大正50、727中)
- 2-唐新羅国順憬伝。浪群人也。本土之氏族。東夷之家系(以下略)(50、728上中)
- 3-唐憇州慧沼伝。釈慧沼。不地可許人也。(省略)。及菩提流至於崇福寺訳大宝積経。沼預其選允証義。新羅勝莊法師執筆(以下略)(50、728下)

<sup>21</sup> 筆者は巻22慧旻伝の「新羅光法師」に関しては円光とは異なる人物と考1998年韓国・仏教春秋社に「花郎世紀を通してみる円光」と題して提出したが紙幅の関係上一部しか掲載されず(韓国・仏教春秋社『仏教春秋』第12号、1998年7月、70-80項)、全文は仏教春秋社が企画中の高僧シリーズに掲載されることになっている。未だ発刊をみないが、もし発刊の暁には参照されたい。尚、それ以外に円光関係の拙稿として以下のようなものがある(1993.9)新羅円光法師伝考、韓国・大韓伝統仏教研究院『羅・唐仏教の再照明』、(1994.3)新羅円光法師伝再考—円光の生没年代について—、『印度学仏教学研究』42-2。

<sup>22</sup> 『仏典解題辞典』(春秋社、1966年、227項)。



- 4-唐新羅国義湘伝。釈義湘。俗姓朴。鷄林府人(以下略)(50、729上中下)
- 5-唐新羅国黄竜寺元暁伝大安。釈元暁。姓薛氏。海東湘州人也(以下略)(50、730上中)
- 6-唐代五台山清涼寺澄観伝。釈澄観。姓夏侯氏。越州山陰人也。(省略)。大曆中就瓦棺寺伝起信涅槃。又於淮南法蔵。受海東起信疏義(以下略)(50、737上中下)
- 7-唐京師西明寺慧琳伝。釈慧琳。姓裴氏。疎勒国人也。(省略)。殆大中年有秦請入蔵流行。近以海中高麗国雖三韓夷族偏尚釈門。周顕徳中遣使齋金。入浙中求慧琳音義。時無此本故有闕如(以下略)(50、738上中)
- 8-唐温州竜興寺玄覚伝。釈玄覚。字明道。俗姓載氏。(省略)。其門人吳興師新羅国宣師(以下略)(50、758上中)
- 9-晋永興永安院善靜伝靈照。釈善靜。族姓王氏。長安金城人也。(省略)。次杭州竜華寺釈靈照本高麗国人也。重訳而来学其祖法(以下略)(50、787下-788上)
- 10-唐百濟国金山寺真表伝。釈真表者。百濟人也。家在金山世為弋弋(以下略)(50、793下-794上中下)
- 11-陳新羅国玄光伝。釈玄光者。海東熊州人也(以下略)(50、820下-821上)
- 12-唐成都浄衆寺無相伝。釈無相。本新羅国人也。是彼土王第三子(以下略)(50、832中-833下)
- 13-唐資州山北蘭若処寂伝。釈処寂。俗姓周氏。蜀人也。(省略)。如無相大師自新羅国将来謁選禪師(以下略)(50、836中)
- 14-唐池州九華山化城寺地藏伝。釈地藏。姓金氏。新羅国王子之也。慈心而貌悪。(以下略)(50、838下-839上)
- 15-唐朔方靈武下院無漏伝。釈無漏。姓金氏。新羅国第三子也(以下略)(50、846上中下)
- 16-晋天台山平田寺道育伝。釈道育。新羅国人。本国姓氏未詳練。自唐景福壬子歳來遊于天台(以下略)(50、858中)
- 17-唐高麗国元表伝。釈元表。本三韓人也。天宝中来遊華土(以下略)(50、895中下)

伝としては、明らかに朝鮮僧と分かるはずであるが、何故か未詳氏族として記される1-円測伝、新羅国と明記される2-順憬伝・4-義湘伝・5-元暁伝、百濟滅亡後にも拘わらず百濟国の僧として記される10-真表伝、熊州という地

名を考慮すれば百済国であるが新羅国の僧とされる11-玄光伝、新羅国の王子又はその支属とされる12-無相伝(尚、無相に関しては13-処寂伝中でも言及されている)・14-地藏伝・15-無漏伝、新羅国としての16-道育伝、そして高麗国の17-元表伝、以上の11例がみられる。更に他の伝に付随したものであるが、3-慧沼伝中の勝莊、5-元暁伝に付随する大安、8-玄覚伝中の新羅国宣師、9-善静伝に付随する靈照、以上四師がみられ、その他に僧名ではないが、6-澄観伝に元暁の著書『海東起信疏』、7-慧琳伝に高麗に対する「近以海中高麗国雖三韓夷族偏尚积門」という記述がみられているが、これ等が『宋高僧伝』にみられる韓国僧及び関係記事の全てである。つまり531人の中の11人、付随及び若干の言及を含めても15人を数えるだけで凡そ全体の約3%、しかし実は伝の中には名だけを出す例も多々あり531人は更に増えるわけで、それ等を合すると朝鮮僧、及び朝鮮に言及する割合は更に減少するのである。勿論、朝鮮への言及が少ないからといって贊寧が朝鮮僧に対する正当な認識がなかったと一概に言えるものではない。しかし、既に指摘した1-円測伝・10-真表伝・11-玄光伝等での記述を勘案すれば、当時の中国内での朝鮮僧関連の史料がそれ程多くないために、贊寧も結局、道宣と同様に他の記憶を頼りに記すしかなかったことが窺われ、更には贊寧の朝鮮僧に対する関心ということも問題にできるのではないかと思うものである。

### (3) 『新修科分六学僧伝』の場合

『新修科分六学僧伝』は、曇鸞が慧皎の『高僧伝』、道宣の『続高僧伝』、贊寧の『宋高僧伝』を基に、後漢明帝代から宋代までの僧を収録した僧伝である。成立は序文によれば至正丙午年(1366)6月までに撰したものと考えられ、その特色としては先行の三本の科文が十であるに対して、本伝は六学(慧・施・戒・忍辱・精進・定)を十二科(訳経・伝宗・遺身・利物・弘法・護教・摂念・特志・義解・感通・証悟・神化)に分類しているところと、先行の三本を基に合しているために三本に比して1200人以上もの高僧の伝記を収録していることである。この中で朝鮮僧に関する記録は

- 1-陳玄光。新羅国熊州人。少則精進梵行。逮壯乃涉溟漲。学禪法於中土(以下略)(己統藏經77、89下-90上)
- 2-隋沙門波若。高句麗人也。陳氏有国日。遊学金陵(以下略)(77、93中)
- 3-唐慈藏。新羅国王諸公子也。金氏。父武林官為蘇判異。貴如中朝一品(以下略)(77、96上中下)
- 4-唐義湘。新羅国襄林府人也。年弱冠稔聞中国教法之盛。乃与同志元曉法師。茶笈而西。既遵海岸。曰唐州者。而雨甚塗潦。蘆葦弥望。行無所歸。夜得少夷燥地宿焉。且齋古墓也。骸骨厭然顧之不能無懼意。遂徙陶穴中。鬼物嘯撼終夕。曉公歎曰。疇昔之安為吾無所見也。見則懼而致不若焉。豈非經所謂心生則種種法生。心滅則種種法滅歟。且三界惟心。万法惟識。心外無法。胡用別求。即謝湘而歸(以下略)(77、101中下)
- 5-唐地藏。姓金氏。新羅国王族子也。中慈恕而外敵万。焜幹枋然。力可敵十夫(以下略)(77、115中)
- 6-唐澄觀(省略)大曆中。伋起信涅槃於瓦官寺。受東海起信疏義於淮南(以下略)(77、115下)
- 7-晋靈照。高麗人。入中国。得心法於雪峯(以下略)(77、144中)
- 8-唐法常(省略)新羅王金慈藏。棄位入道。航海求見從受菩薩戒以歸(以下略)(77、209下)
- 9-隋曇遷(省略)又有高麗智晃。善薩婆多部(以下略)(77、218上)
- 10-齊法上(省略)高句麗国丞相王高德。致書問教門端緒。具書答之(以下略)(77、234下)
- 11-唐慧持(省略)聽東安莊法師高麗実法師三論(以下略)(77、239中)
- 12-唐慧旻(省略)年十五。依新羅光法師。聽成論於回向寺(以下略)(77、242下)
- 13-晋道育。新羅国人。唐景福壬子歲。始泛海來中国。遊天台(以下略)(77、251下-252上)
- 14-周円測。幼明敏。講晋翻唯識論。既得時譽。後講新瑜伽論。尤得其指(以下略)(77、274上中)
- 15-唐円光。俗姓朴氏。辰韓新羅人。家世業儒(以下略)(77、291下-292上)
- 16-唐法敏(省略)年二十三。從高麗実公及実亡。印公入蜀。而法席凋替(以下略)(77、295中)
- 17-唐靈睿(省略)隋開皇初高麗印公。開三論。入京皆依以受業(以下略)(77、296下)

- 18-唐慧顛。百濟国人。少誦法華。講三論。皆精詣有師法。住其国之北部脩德寺(以下略)(77、316下-317上)
- 19-唐元暁。新羅国湘州薛氏子也(以下略)(77、318中下)
- 20-唐真表。百濟国人(以下略)(77、319中-320上)
- 21-唐無漏。姓金氏。新羅国王子也(以下略)(77、320下-321上)
- 22-唐元表。高麗人。天宝中。西遊中国。且将往天竺巡礼聖跡(以下略)(77、322下)
- 23-晋曇始。閩中人。史亡其氏。為沙門大元末。遊遼東。授三乘法。為高麗仏教流通之始也(以下略)(77、328上中)
- 24-唐無相。新羅国王之子也。開元十六年。汎海舶東至京師(以下略)(77、341下-342上)

伝として慧学伝宗科に1-玄光、2-波若、3-慈藏、4-義湘、5-地藏、7-靈照、忍辱学持志科に13-道育、精進学義解科に14-円測、精進学感通科に15-円光、定学証悟科に18-慧顛、19-元暁、20-真表、21-無漏、22-元表、定学神化科に24-無相、以上のように14人の伝がみられ、また8-法常伝に新羅慈藏、9-曇遷伝に高麗智晃、11-慧持伝に高麗実法師、12-慧旻伝に新羅光法師、16-法敏伝に高麗実公及び印公、17-靈睿伝に高麗印公というように重複を整理すると5人の名がみられ、更に6-澄観伝には「受東海起信疏義於淮南」として元暁の『起信論疏』の名、10-法上傳には仏教に対する高句麗丞相王高德の書簡での質問、23-曇始伝には高句麗への仏教伝来時に関する言及がみられている。これ等の典拠は23-曇始伝は『高僧伝』、2-波若<sup>23</sup>、3-慈藏<sup>24</sup>、8-法常伝中の慈藏<sup>25</sup>、9-曇遷伝中の智晃<sup>26</sup>、10-の高句麗からの書簡<sup>27</sup>、11-慧持伝中の高麗実法師<sup>28</sup>、12-慧旻伝中の光法師<sup>29</sup>、15-円光<sup>30</sup>、16-法敏伝中の実公及び印

23 『続高僧伝』(巻17智越伝、大正50、570下-571上)。

24 『続高僧伝』(巻24慈藏伝、大正50、639上-640上)。

25 『続高僧伝』(巻15法常伝、大正50、541上)。

26 『続高僧伝』(巻18曇遷伝、大正50、572上)。

27 『続高僧伝』(巻8法上傳、大正50、485中)。

28 『続高僧伝』(巻14慧持伝、大正50、537下)。

29 『続高僧伝』(巻22慧旻伝、大正50、619上)。

30 『続高僧伝』(巻15法敏伝、大正50、538下)。

公<sup>31</sup>、17-靈睿伝中の印公<sup>32</sup>、18-慧顕<sup>33</sup>以上は『続高僧伝』であり、その他の1-玄光、4-義湘、5-地藏、6-澄観伝中の『海東起信論疏』、7-靈照、13-道育、14-円測、19-元暁、20-真表、21-無漏、22-元表、24-無相は『宋高僧伝』を典拠としたものである。『高僧伝』・『続高僧伝』・『宋高僧伝』の三本を典拠とするために必然的に朝鮮僧及び朝鮮仏教に対する言及は多くなっているが、それでは三本中の朝鮮僧及び朝鮮仏教に対する記載を全て忠実に伝えているかということ、決してそうではない。例えば、『高僧伝』法度伝では弟子の僧朗を遼東人と明記するのを、本伝では僧朗の名はあるが「遼東人」という文字を略していること<sup>34</sup>、『宋高僧伝』に於ける朝鮮僧及び朝鮮仏教に関する記述のことは既に紹介したが、その『宋高僧伝』を受けながら本伝の慧沼伝では新羅勝苴法師の記述<sup>35</sup>、慧琳伝では高麗国に関する記述<sup>36</sup>、玄覚伝では新羅国宣師の記述<sup>37</sup>が省略されている。また前述の6-澄観伝は『宋高僧伝』では「於淮南法蔵。受海東起信疏義」となっているのが「受東海起信疏義於淮南」となっていて法蔵の名がみえず、法蔵が元暁の『起信論疏』を参照していたことが伺えない記述となっている。更に19-元暁伝は『宋高僧伝』に比べると「同居土入酒肆倡家。若誌公持金刀鉄錫」等の文がなく元暁の戒に拘らなかったことが知られない記述となっている。このように『新修科分六学僧伝』の記事全てに依ることであるが、全体的に三本の僧伝をそのまま引くのではなく文章の組み替えと簡略化を行っているため、三本併せた朝鮮関係の記事よりも記事が少なくなっているのである。

曇鸞が序で『林間録』の覚範慧洪を「覚範徳洪師顧独潤色」として三本の潤色を行っているとは批判するが<sup>38</sup>、曇鸞の組み替えと簡略化も曇鸞が批判した

31 『続高僧伝』(巻15法敏伝、大正50、538下)。

32 『続高僧伝』(巻15靈睿伝、大正50、539下)。

33 『続高僧伝』(巻28慧顕伝、大正50、687下)。

34 『高僧伝』(巻8法度伝、大正50、380下)、『新修科分六学僧伝』(巻24、272下)。

35 慧沼伝『新修科分六学僧伝』(己統藏経77巻、274中)、尚、『宋高僧伝』の該当箇所に関しては前註を参照されたい。

36 慧琳伝『新修科分六学僧伝』(己統藏経77、193中)。

37 玄覚伝『新修科分六学僧伝』(己統藏経77、103下)。

38 『新修科分六学僧伝』(己統藏経77、64下-65上)。

『林間録』<sup>39</sup>と同じようなものと感ぜざるをえない。

#### (4) その他

その他として、義浄の『大唐求法高僧伝』は、唐初から義浄の時代までの印度への60名程の求法僧の伝を集めたものである。その中で8名の新羅僧の名が知られていてその多さに驚くものであるが、慧輪を除けば求本は目次に名はあるが本伝には記事がなく、玄遊は僧哲禅師条に「僧哲弟子玄遊者。高麗国人。随師於師子国出家。因住彼矣」<sup>40</sup>と付記されるだけで、他の5名も他の記憶を頼りに記したもので、中国僧に比べて記事が短く過去にそのような新羅僧がいたことが知られるだけである。

『弘賛法華伝』は恵詳による東晋から唐代までの法華経流伝に関する著述で150名程の僧伝が記されている史料である。朝鮮僧は慧顕・新羅沙弥・縁光の三名の伝がみられ、縁光条の末尾に「有新羅僧連義。年方八十。弊衣一食。精苦超倫。与余同止。因説此事。録之云爾」<sup>41</sup>とあり、他の二名慧顕・新羅沙弥(金果毅)共に求法の記録がないことから縁光同様に求法の朝鮮僧からその伝を伝え聞いて録したもののようである。

『法華経伝記』は僧祥が200名程の法華経研究および信仰の諸徳の伝を記したもので、朝鮮僧は「諷誦勝利」に法華受持の功德により神異を表したとされる縁光・道人(発正)・慧顕三名の伝がみられている。慧顕伝に関しては『弘賛法華伝』と若干の語句の相違もあるが殆ど同じである。ただ『光賛法華伝』に比べると縁光伝が「釈縁光。是智者門人。誦法華経為業。感天帝下迎竜宮請講。滅後舌色如紅蓮華而已」<sup>42</sup>と簡潔に記されていることと、新羅沙弥の伝

<sup>39</sup> 『林間録』(巳統蔵経87)は臨済宗黄竜派の覚範慧洪(1070-1128)の撰による禅宗諸師の言行語要を始め叢林の遺訓30余を収録したもので、成立年は臨川謝逸の序に「大観元年十一月一日」とあることから1107年11月以前と考えられる。曇蘊に批判を受けているが実は慧洪も『林間録』撰述にあたって

賛寧作大宋高僧伝用十科為品流以義学冠之已可笑又列崑頭豁禅師為苦行智覚寿禅師為興福雲門大師僧中王也与之同時竟不載何也(巳統蔵経87、246中)

以上のように賛寧『宋高僧伝』の科文に対する、または有名な禅師や大師を載せなかったことに対する批判がみられている。尚、『林間録』には元曉条があり、更に東京覚厳寺有誠法師条に義天への言及がみられている。

<sup>40</sup> 『大唐求法高僧伝』(大正51、8下)。

<sup>41</sup> 『弘賛法華伝』(大正51、20中)。

はない代わりに道人(発正)の伝<sup>43</sup>が録されているところが異なっているところである。

『仏祖統紀』は志盤が中国天台宗の立場から正史の体裁に倣って仏伝、印度中国の高僧の伝記、天台宗流伝の次第を編纂したもので、朝鮮僧の記載は僅か9名を数えるのみで、慧思の許で法華三昧を証した玄光と智顛の門にいた般若(波若)に関しては伝があるものの、左溪玄明の法脈を法融・理応・純英等が伝えたとされる左溪旁出家の三人の詳細がわからず新羅時代の天台宗流伝自体が不明となっている。しかし、呉越中懿王の求めに応じ天台の典籍を中土にもたらした諦観と、高麗時代に入宋求法し帰国後天台学を復興させ、一宗として国家的承認を得せしめた義天に関しては各条項の他にも言及がみられている<sup>44</sup>。これは諦観は典籍をもたらした功績により、また義天は朝鮮天台の復興の功績もさることながら「王氏高麗国文宗仁孝王第四氏」という出自も中国人の興味を引き、『仏祖統紀』ばかりではなく諸伝に引かれたものと考えられる。

『景德伝灯録』は道原が過去七仏、天竺十五祖を始めとして以後の禅宗五家五十二世に亘る1700名程の伝灯流系を整理したものである。その中で「無機縁語句不録」として名のみ挙げられるものが概略950名程もいる。朝鮮僧は41名も挙げられているが、実際に語句まで記録されているものは13名程で全体の割合からすると収録は僅かにすぎない。また『景德伝灯録』に続く円極居頂の『続伝灯録』は『景德伝灯録』を上回る僧名と語句を記録しているが、朝鮮僧はただ坦然一人が挙げられているだけである。恐らくは禅学という特殊な受学形態によるものと思われるが、例えば『景德伝灯録』での中国僧に比べての朝鮮僧の集録語句の短さと、また語句はないものの大証禪師法嗣二人として文聖大王・憲安大王、洪直禪師法嗣二人として興徳大王・宣康太として諸王の名が挙げられている<sup>45</sup>ことを勘案すれば、史料編纂者の朝鮮僧の重用度と関

<sup>42</sup> 『法華経伝記』(大正51、61下)。

<sup>43</sup> 発正の伝は牧田諦亮『六朝古逸観世音応験記の研究』(平楽書店、1970年)で紹介する「観世音応験記」にみられ、牧田氏が指摘するように語句の相違は多くみられるが同内容である。『法華伝記』が「観世音応験記」を参照したものであろう。

<sup>44</sup> 概観するだけでも諦観に関しては本伝(『仏祖統紀』大正49、206上中)以外に189下-190上、201下にみられ、義天は本伝(223中下)以外225下、294上にも詳細な言及がみられている。

心の向きを察することができまいか。

上記以外に権相老師が朝鮮僧を引く史料として『釈門自鏡録』・『三宝感応要略録』・『神僧伝』を挙げているが、筆者が指摘するところは上記の史料と同じような問題である。

#### 四、結びにかえて、中国史料を用いる際に思うこと

以上、朝鮮仏教史研究の指針となる権相老師の研究と、そして師が指摘する朝鮮僧を引く若干の中国僧伝類をみてみた。ここで筆者が権相老師の研究を補足したが、師が見落としたように筆者自身も見落としが多々あるものと思う。先行研究はあくまでも参照するだけに止めるべきである。改めて金知見先生のお言葉の意味を確認するものである。

さて中国僧伝類であるが、多くの僧伝類が『続高僧伝』、及び『宋高僧伝』を典拠としていること。そして、例えば天台宗や禪宗等の僧伝がそれぞれの立場から上記史料を参照しているが、その目的のために後代の僧伝ほど記述が簡略化するという傾向が指摘できる。また典拠となる『続高僧伝』、及び『宋高僧伝』自体も朝鮮僧に関しては先行史料が少ないために、朝鮮からの求法僧から伝え聞くか、または他の記憶を頼りに記すしかなかったために不安の残る記述も少なくない。ここで思うことはあたりまえのことではあるが、中国僧伝類はあくまでも二次史料とし、更にそれを補うために中国諸師の章疏類を整理しそれを朝鮮仏教史研究に用いるということである。日本では奈良時代から江戸時代まで多くの日本諸師の章疏類に朝鮮僧の著述の引用が多くみられていることは周知のことであるが、中国諸師の章疏にも朝鮮僧の著述の引用と共に朝鮮への言及が多々みられている。勿論、それ等個々の章疏に関する研究、例えば華嚴学・唯識学を中心とする研究は既に行われているところであるが、それ等を総合的に朝鮮仏教史研究に反映させる研究は未だ途上のようなものである。それ等を整理しての研究を今後の課題とし、金知見先生のお言葉を胸に、後日一つ一つ整理して行きたいと思っている。

45 『景德伝灯録』(大正51、282上)。